集中講義報告「日本の文学教育」(釜山教育大学校)

A report of special lecture'Literary education in Japan'at
Pusan National University of Education

足　立　悦　男*
Etsuo ADACHI

要　旨

本学部のFD研究の一つの試みとして、釜山教育大学校(韓国)での集中講義の概要を報告する。釜山教育大学校での集中講義は、島根大学教育学部・釜山教育大学校の教育・研究交流促進に関するプロジェクト(教育改善推進経費)として実施された。2000年11月13日～11月18日の6日間、釜山教育大学校に滞在し、6回の講義と1回の講演と、国語教育科の研究者との研究交流を行った。本稿は、その概要の報告である。

[キーワード]　FD　日韓比較文学教育　講義内容　講義テキスト　講義方法

釜山教育大学校の集中講義

釜山教育大学校で講義をするのは二度目であった。一度目は1996年8月、韓国語文教育学会20周年記念大会に招かれて招聘講演を行った。演題は「日本の文学教育の現状と課題」、国語・国文学の研究者、小・中・高校の国語教師を対象の講演であった。今回は、釜山教育大学校の大学生対象の3日間の集中講義である。講義においては、日本の文学教材との出会いを重視した。日本のすぐれた文学として味わいながら、韓日相互の文学教育のあり方について学べるように工夫した。

釜山教育大学校の集中講義は、3日間に6回行った。すべて釜山教育大学校の希望による日程であり、国語教育科の教官の授業を使った講義であった。できるだけ多くの学生に日本語による授業を受講させたい、という意向のようであった。それと、1回は私の希望で、本学部附属小学校と交流のある附属初等学校の生徒に講演を行った。

通訳の全允景さんは、学生時代に1年間、東京学芸大学国語教育学科に留学の経験があり、講義テキストの内容を十分理解できる方であった。テキストは、日本の国語教科書から、日本語入門期の教材、詩・物語作品で作成した。詩には日本語にハングルでルビをふり、韓国語の翻訳を付けた。(テキスト例を参照)物語は長いので、韓国語でカセットに録音したテキストを使用した。テキストの作成(翻訳)には国語研究室の留学生、申美熙さんに協力してもらった。

*島根大学教育学部国語教育研究室

集中講義の日程と概要

一日目（11月14日　火）

①　2・3限（国語教育科4年　美術教育科3年）

・（講師紹介）

・日本の国語教科書の紹介

・日本語レッスン　あいさつ　あいうえおのうた　がぎぐげごのうた

・詩　かえるのぴょん

・物語　くじらぐも

講義に先立って、国語教育科主任の李愼成教授による講師紹介があった。そして、学生代表が花束をもって登壇し、歓迎の言葉を述べてくれた。私は、今回の講義を楽しみにしてきたこと、講義テキストには日本のすぐれた文学作品を選定したので、十分味わいながら、韓日の文学教育のあり方について考えてみましょう、と述べて、講義をはじめた。講義テキストに文学教材を多く使うのは、理念や理論の交流の前に、まず先入観なしに、日本の文学そのものと出会っていただきたいからである、と話した。最初の国語教科書の紹介は、私の編集している教育出版の教科書を使った。実物を回覧しながら、同時にOHPに写しながら、編集者の立場から日本の国語教科書の仕組みについて説明を行った。

日本語レッスンは、全クラスで試みようと思っていた。事前の情報で、釜山教育大学校には日本語関連の授業がないので、日本語を理解できる学生はほとんどいない、しかし、学生の日本語に対する関心は高いということだったので、国語教科書の入門期教材をテキストにして、日本語レッスンを入れた。日本語の挨拶やひらがな五十音を、絵入りのテキストを見ながら音読する。私の範読の後でしばらく練習して、全員で音読（斉読）する、というレッスンである。「あいさつ」のレッスンのときに、ハプニングがあった。一人の学生が「お元気ですか？」と言ったので、「元気です」と答えると教室中が沸いた。通訳の全さんが、「お元気ですか？」は韓国の大学生はみんな知っています。「お元気ですか？」「私も元気です」は、昨年公開された日本映画「ラブレター」で大ヒットした日本語ということであった。全さんの勧めで、2回目の講義から、「あいさつ」のレッスンにこのセリフを入れることにした。2回目からは、講義の始めに「お元気ですか？」と聞くと、「元気です」と大きな返事がかえってきて、なごやかな幕開けになった。

「あいうえおのうた」「がぎぐげごのうた」は、ことばあそびの詩で、詩人のまど・みちおの創作である。日本の日本語入門期教材（ひらがな五十音）は、ことばあそびの詩として工夫されていること、音声言語の教材は日本語のリズムを大事にしていることを、音読レッスンを通して体験的に理解してもらった。日本語を正確に音読するのは、はじめての学生が多く、興味ぶかいレッスンになったようだ。

「かえるのぴょん」は、日本を代表する詩人、谷川俊太郎の作品として取り上げた。今年の4月、附属小学校の入学式において、校長として新入生とその保護者に贈った詩である、ということを話した。子どもたちは、この詩のぴょんのように、いろんなものを飛び越えていく存在であること、子どもの世界に内在する無限の可能性をうたった詩であると解説し、全員で何度も音読した。最後は「ぴょん　ぴょん　ぴょん　ぴょん」の大合唱になった。この場面でも、ハングルのルビは効果的であった。

物語は、「くじらぐも」（なかがわ　りえこ）を取り上げた。物語教材は長いのでプリントをしないで、韓国語で聞いてもらうことにしていた。留学生の申美熙さんが韓国語に翻訳してカセットに録音してくれたテキストを使用した。「くじらぐも」は、運動場で体操をしていた子どもたちが、鯨の形をした雲に乗せてもらって思いっきり空の世界で遊ぶ、という物語である。日本のファンタジー文学の代表的な作品として紹介した。そして、日本の文学教育では、ファンタジー文学をたいへん重視していること。韓国の教科書には少ないが、ファンタジー文学は、子どもの想像力を解放するために必要な文学である、ということを話した。最初の講義であったので、一つ一つのテキストを丁寧に扱った。あっという間の二時間だった。

②　5・6限（国語教育科3年）

・韓日国語教科書の比較

・日本語レッスン

・まど・みちおの世界（ぞうさん　まめつぶうた　けしごむ　大きなアップルパイ）

・物語　大きなかぶ

①の講義が終わったあと、聴講しておられた周康植教授が、韓国の国語教科書を1セット持ってきてくださった。そこで、この講義では、韓日の国語教科書の比較という視点を入れた内容にした。韓日の教科書を示しながら、韓国の国語教科書は教育省の発行する国定教科書であること、日本の国語教科書は、小学校の場合六社の民間の出版社の発行する検定教科書であり、文部省の検定をうけて発行されていること、日韓の国語教科書の比較研究を、私の研究室に留学していた金京姫さん（大学院生）と行ったことがあること、などを話した。

この講義は、国語教育科の3年生だったので、専門的な内容とした。授業担当のイ・ヘウン教授は詩論研究の第一人者で、現代時調の詩人でもある。この時間は韓国詩の授業と聞いていたので、私は、日本の子どもたちに親しまれている文学として、まど・みちおの詩を取り上げることにした。最初に童謡として、まど・みちをの「一年生になったら」「やぎさんゆうびん」「ぞうさん」を、童謡歌手のビデオで紹介した。その後で、詩集『まめつぶうた』所収の作品、「けむし」「のみ」「みみず」「いびき」「えんとつ」の五編について、まど・みちおの詩の世界を存分に楽しんでもらった。「まめつぶうた」とは豆つぶのように小さな歌という意味である。一番人気は「いびき／ねじをまく　ねじをまく　夢が　とぎれないように」という作品であった。

次に、「けしごむ」「大きなアップルパイ」の2編を取り上げた。「けしごむ」は、自分が書き間違えたのではないが「いそいそと消す」。自分が汚した汚れでもないが「いそいそと消す」。そして消すたびに自分がなくなって「いそいそと」消えてしまう。正しいと思ったことだけを、本当と思ったことだけを、美しいと思ったことだけを、身代わりのように残しておいて、という何とも切ない内容の詩である。学生たちは、自分の消しゴムを見つめてシーンとなった。「大きなアップルパイ」は牛の糞のことを歌った詩である。牛のお尻が野原の道に落としていった、大きなアップルパイである。そこにいろんな人物が通りかかる。人間どもは顔をしかめ、ハエとコガネムシはにこにこし、太陽はあたりまえに照らし、そよ風はやさしくなでた。顔をしかめたのは人間だけである。牛の糞はといえば、満ち足りて故郷を見渡している。ここにさえ帰れたら、もう何も言うことはない、と。二編とも奥行きの深い思想をもった詩である。日本の少年詩（児童

文学）のレベルを伝えたいと思って選んだ詩であった。まど・みちおの世界については、一番印象に残った作品について、題名と選んだ理由を書いてもらった。（参考資料を参照）

この講義の後半は、物語「大きなかぶ」（さいごう　たけひこ・訳）のプリントを使って、音読（斉読）を行った。「大きなかぶ」は、おじいさん、おばあさん、まご、いぬ、ねこが登場し、大きなかぶをひっぱるが抜けない。最後に一番小さなねずみが加わって、とうとう抜けた、という話である。日本の子どもたちの大好きな作品であること、引っ張るときの「うんとこしょ　どっこいしょ」という掛け声は、反復の手法によって子どもたちを熱中させる表現法であることを説明した。また、日本の国語教科書には外国のすぐれた作品が多く掲載されていること、「大きなかぶ」はロシア民話であることを、OHPに教科書の挿し絵を写しながら説明した。その後で、6つのグループに分けて、かぶが抜けるまで（抜けたと実感できるまで）、何度も日本語（ハングルのルビ）で音読を繰り返した。「うんとこしょ　どっこいしょ」の音読（斉読）はしだいに力強くなり、とうとう抜けたという実感を共有できるまで繰り返した。みんなで抜けたと実感できたとき、一斉に大きな拍手が起こった。大きく盛り上がったところで授業を終えた。

二日目（11月15日　水）

③　1・2限（コンピューター教育科3年）

・日本語レッスン

・日本の話しことば教材の工夫（「朝ごはん」「町にかばが来た」「子ども広場」）

・詩　「のはらうた」の世界

・物語　へらない稲束（韓国民話）

受講生は、コンピューター教育科の学生であった。日本の教育大学・教育学部にはなく、韓国の教育大学でも珍しく、釜山教育大学校の人気学科であるということだった。

この講義では、日本語レッスンのあとに、少し視点を変えて、日本の国語教育が今もっとも力を入れている「話しことば教育」（音声言語教育）を取り上げた。教材開発の事例として、教育出版の教材をOHPに写しながら紹介した。「朝ごはん」（低学年）は、11匹のウサギ一家のにぎやかな朝ごはんの食卓風景である。ウサギにすてきな名前をつけてあげましょう、名前が決まったら自己紹介しましょう、朝ごはんを食べながら何を話しているでしょう。「ウサギさんになって」という教材である。「町にかばが来た」（中学年）は、町に大きなかばがやってきて、町中が大あわて。放送記者になって、町の人に取材してみましょう、そして、ニュース番組で放送してみましょう。「聞きたいことをはっきりさせて」という教材である。「子ども広場」（高学年）は、いろんな遊び場のある子ども広場に行って、何をして遊ぶか、楽しい計画を立てて、友だちを誘ってみましょう。「大事なことをおとさずに」という教材である。OHPに大きく写しながら、日本の教材開発の工夫について話した。視覚的なテキストであったからか、学生たちは興味をもって聞いていた。

次に、「のはらうた」の世界という詩を取り上げた。文学の方法として、何かになりきって表現するという虚構の方法がある。私は文学教育の重要な方法と考えている。テキストには、詩集『のはらうた』（工藤直子）から、八編の作品を選んでプリントしてあった。「あいさつ」（へびいちのすけ）「こころ」（こいぬ　けんきち）「ひだまり」（とかげ　りょういち）「くらし」（き

りかぶ　さくぞう）といった作品である。どの作品も、誰かに、何かになって書く、という方法で創作された詩である。たとえば、「ひだまり」は、「しろく　やわらかい　おなかを／いしにぴったりと　くっつけ／いきを　はいたり　すったりすると／しっぽの　さきまで　ねむくなる」という作品である。全允景さんの通訳に、学生たちは静かに聞き入っていた。そして、一番好きな詩を選んでもらい、何名かに発表してもらったあと、作文に書いてもらった。(参考資料を参照)

この時間の最後は、韓国民話「へらない稲束／줄지 않는 볏단」（李錦玉）のテープ（韓国語）を、教科書の挿し絵をOHPに写しながら聞いた。「へらない稲束」は、貧しくて仲のよい兄弟がいて、お互いの生活の苦しさを思いやり、お互いに隠れて稲たばを相手の家にもっていく、という兄弟愛の物語である。儒教的な倫理から親子や兄弟の愛情を重視する韓国らしい物語の例として選んだ。「へらない稲束」は学生たちもよく知っていた。そして、日本の国語教科書に載っていることを不思議がった。日本の国語教科書は、これまで外国の文学というとヨーロッパの作品が多かったが、最近ではアジアの文学に注目していることを、私の編集経験をもとに話した。

④　5・6限（音楽教育科3年）

・日本語レッスン

・詩「かえるのぴょん」（日本の音韻論）

・詩「かっぱ」（群読）

・物語　三年とうげ（韓国民話）

この講義では、昨日私の講義を聴講しておられたイ・ムンギュ講師から、テキストのリクエストを受けていた。「かえるのぴょん」（谷川俊太郎）はすばらしい詩だったので、是非この時間にもう一度取り上げていただけないか、という申し出であった。イ・ムンギュ講師は音韻論の研究者であった。また、受講者が音楽教育科の学生であったので、「かえるのぴょん」を使って、日本の詩のリズムについて体験を通して理解してもらうことにした。通訳の全さんに詩の意味を翻訳してもらったあと、何度も日本語で「かえるのぴょん」の音読の練習をした。そして、日本語で音読すると、なぜリズミカルに感じるのか、という問題を出した。学生たちはハングルのルビを頼りに音韻を数えはじめた。5音と4音（8音）という定型のリズムであることを発見する。日本語の定型詩によくみられる5・7、7・5のリズムの変形であることの発見であった。韓国語訳には、このリズムはみられない。韓国の詩には韓国の音韻の生み出す独自のリズムがある。授業のあとで、イ・ムンギュ講師と韓国詩のリズムとの違いについて話し合った。

つづいて、音楽教育科の学生なので、「かっぱ」（谷川俊太郎）の「群読」をやることにした。河童は日本の伝説上の動物であること、この詩はリズミカルなナンセンス詩であって、音読を味わう教材であること、「かっぱ・らっぱ・なっぱ」の韻律で構成されていること、などを説明したあとで、群読という方法で音読してみませんか、と誘いかけた。「群読」とは分担して音読する方法であり、日本の音読教育を大きく進展させた方法である。多様な音読の工夫のできる方法であり、教育現場に次第に取り入れられつつある。ただ、いきなりでは難しいと思ったので、日本でとってきた私の群読授業のビデオをみてもらった。訪韓の直前に、国語研究室の学生に群読指導をしたときのビデオである。

2つのグループに分けて、いろんな方法で群読を楽しんだ。1行の後を追っかけていく方法、

１語を追っかけていく方法などである。最後に、３グループに分かれて、１語を追っかけていく群読を試みた。かっぱ(A)－かっぱ(B)－かっぱ(C)と追っかけて重ねて音読していく、音楽でいうカノンのような方法である。何度か練習して最後に成功したときは、教室中が「かっぱ・らっぱ・なっぱ」という日本語のリズムでいっぱいになった。この授業の最後に、イ・ムンギュ講師は、今日の授業で教えていただいたことを参考にして、韓国の音読教育について考えてみよう、という課題を出された。

物語は「三年とうげ／삼년 고개」（韓国民話）の朗読テープ（韓国語）を聞いてもらった。韓国の小学校教科書に載っていて、よく知っている民話なので、学生たちは、なつかしそうに聞いていた。

三日目（11月16日　木）

⑤　１・２限（倫理教育科３年）

・日本語レッスン

・詩　こゆび

・相田みつをの書　にんげんだもの

・物語　かさこじぞう

この時間は、倫理教育科の学生であった。日本でいうと道徳教育学科となろうが、日本の大学にはない学科である。小学校で儒教倫理の教育を重視している韓国らしい学科といえる。日本の国語教育では道徳教育は行わないが、文学教材には質の高い倫理的な内容をもっている作品もある。学生の専攻を考えて、そういう性格のテキストを使用することにした。

「こゆび」（こわせ　たまみ）は、小指の存在感をうたった詩である。こゆびは、ゆびの赤ちゃんだから、おはしも持てない、スプーンも持てない、みかんもむけない、おかしもつまめない。何もできない無力な存在である。でも作者は、たった一つできること、こゆびにしかできないことがある、と言っている。それは何だろうか、と問いかけた。学生たちは話し合っているうちに、少しずつわかってきたらしかった。「ゆびきりげんまん　また明日／明日のやくそく　ね　できるでしょ」を通訳してもらうと、当たっていた。一見何もできないように見える小指の存在感をテーマとした詩である。この小指は、比喩的にいえば子どもたち自身である。小さなもののアイデンティティをうたった詩であり、韓日の文学教育において、これから重視すべきテーマの一つであろうと話した。

相田みつを「にんげんだもの」は、日本の「書」作品として、そして倫理的な内容の詩の例として取り上げた。「書」の作品なので、OHP で写しながら視覚的に鑑賞してもらった。「つまずいたって　いいじゃないか　にんげんだもの」「よわきもの人間　欲ふかきもの　にんげん　偽り多きもの　にんげん　そして　人間のわたし」「花は　ただ咲く　ただひたすらに」など、10作品ほど取り上げてみた。学生たちは私の解説をしんとして聞いている。「書」作品の力を実感させてくれるシーンであった。授業のあとで、国語教育科の先生がたは、相田の「書」に大きな関心を示された。10数枚のコピーをもっていたので、お好きな作品を差し上げた。

物語としては、「かさこじぞう」（いわさき　きょうこ）のカセットテープ（韓国語訳）を聞いた。そして、「かさこじぞう」を例として、日本の民話教材の特徴について話した。民話とは一

般には民衆に伝承されてきた説話（民間説話）のことであるが、日本の国語教科書では、児童文学作家によって創作（再話）された作品を多く採用している。また、国語教科書の民話には、「大きなかぶ」(ロシア)「スーホの白い馬」(モンゴル)「三年とうげ」(韓国) など、外国の民話もよく採用されていることを話した。韓国の代表的な民話が日本の教科書に載っていることに、学生たちは驚いていた。これからの韓国の小学校教育でも、「かさこじぞう」など日本のすぐれた民話を、韓国の子どもたちに紹介してほしいと話した。子どもたちの日韓文化交流のために、私は必要なことだと考えている。

⑥　講演　「おちば」の世界　(附属初等学校５年生)

講義を終えると、迎えの車が玄関に待機していて、すぐに附属初等学校を訪問した。朴吉弘校長には、釜山教育大学校・島根大学教育学部交流10周年記念式典（島根大学　2000年６月）の後で、玉致律総長と附属小学校を訪問していただいたことがあり、再会を喜びあった。その後、子どもたちの待つ講演会場に向かった。会場に入ると、５年生全員（120名）が大きな拍手で迎えてくれた。小学校長としての講演であり、私はこの講演を楽しみにしていた。

釜山教育大学校附属初等学校と島根大学教育学部附属小学校は、児童の相互訪問交流を始めて10年になる。２年に１度、児童の代表10数名が相互訪問し、全校児童との交流をかさねてきた、という交流の歴史がある。来年度（2001年）にはその相互訪問が計画されているので、訪問予定の５年生（来年の６年生）を対象とした講演をすることになった。通訳は全允景さんにお願いした。

壇上に立つと、私は一枚の落葉を子どもたちに見せた。後ろのスクリーンに大きく写っている。その日の朝、大学のキャンパスで拾った落葉であった。附属初等学校は大学のキャンパスの中にある。子どもたちは毎日キャンパスの落葉を踏みしめて登校している。

落葉は、なぜ、木から落ちるでしょうかと、私は問いかけた。風が吹くから、と多くの子どもたちが答えた。でも、春や夏の季節の葉は風が吹いても落ちない。なぜ、秋になると葉が落ちるのかな、と聞くと、考えこんでいる。冬が近づくと寒くなり、木は自分自身を守るために、葉を落葉として落としてしまう。木にとって落葉は不要なものなのです。でも、落葉は、本当に不要なものなのでしょうか、と改めて問いかけた。そして、ちょうど今頃の季節に、日本の子どもたちが学習している「おちば」という詩を、今日は紹介しましょう。プリントに載っているのがその詩です、と言って、プリントをみるように指示した。プリントには、日本語の詩と、ハングルのルビと、韓国語の翻訳が付けてあった。

おちば（낙엽）　みつこし　さちお

①　おちばを　ことりにして／そらへ　とばしたのは／(　　)
②　おちばを　ふとんにして／はるまで　ねるのは／(　　)
③　おちばを　さらにして／ままごとするのは／(　　)
④　おちばを　しおりにして／(　　) は　ほんのあいだに／
　(　　) を　しまいます

まず、私が読んで、詩の内容を通訳してもらった。( )を除いて内容の理解ができたところで、私は問題を出した。( )の中の私は誰でしょう（저는 누구일까요？）、と。プリントには、下の方に4人の人物名が書いてあった。「ぼく（나）／ふたりの妹（여동생 둘）／山のどんぐり（산도토리）／いたずら北風（장난꾸러기 북풍）」の4人である。人物名はできるだけ韓国語で呼ぶことにした。そして、しばらく時間をとりますから、隣の人と話し合ってみて下さいと指示した。子どもたちは、韓国語の翻訳の方を見ながら、誰だろうか、と話し合っている。

①連から順に問いかけていった。「おちばを　ことりにして／そらへ　とばしたのは／누 구 일 까 요？」と。「いたずら北風」という声が一斉に返ってきた。正解ですというと、大きく拍手がおこった。②連は「山のどんぐり」、③連は「ふたりの妹」、④連は「ぼく」である。生徒の全員が当たっていた。④連にはもう一つ（　）がある。「おちばを　しおりにして／（ぼく）は　ほんのあいだに／（何を）しまいます」か、と聞いた。難しい問いである。答えられると思っていなかった。すると、一人の生徒が挙手したので、全さんが指名した。中段に座っていた児童が小さな声で「秋」と答えた。正解であった。あなたは詩人ですね、と言うと、にっこり笑った。印象に残る生徒であった。この授業は、文芸研の開発した詩の授業方法を参考にしている。

次に、( )の中の人物がすべて埋まったので、全員で朗読することにした。私が日本語で読み、全允景さんが韓国語を読み、子どもたちが韓国語で読む、という音読法である。そして、朗読のあとで私はこんな話をした。はじめに私は、皆さんに、落葉は本当に不要なものでしょうか、と聞きました。「おちば」という詩をみると、全然そうではないですね。いたずら北風にとって、山のどんぐりにとって、ふたりの妹にとって、ぼくにとって、とっても大事なもので、なくてはならないものです。しかも、それぞれの人にとって、価値がみんな違いますね。「おちば」の詩はこういうことを教えてくれていると思います。皆さんのこれからの人生には、この「おちば」の詩のように、皆さんの本当の価値を見つけてくれる、すばらしい出会いがあるでしょう。今日のこの詩をずっと覚えておいてもらえたら、うれしいです、という話をした。

最後に、「おちば」の詩をもう一度、みんなで朗読しましょう、というと、通訳の全さんが、先生、子どもたちは日本語で読みたがっています、と耳打ちしてくれた。私はおどろいた。小学生のテキストなので、日本語に添えたビルは日本語の発音を聞きとるために付けたものだった。でも、子どもたちは日本語で読みたがっている。では、日本語で読みましょうかと言うと、子どもたちは喜んだ。私のリードで一行ずつ、ゆっくりと音読していった。日本の朗読と全く同じ光景である。子どもたちの発音は正確で、きれいな日本語であった。この時の子どもたちの音読の声は、さわやかな印象として残っている。

講演のあと、朴校長のお礼の言葉があり、大きな韓国人形をプレゼントされた。現在、校長室の私の机の横に飾ってある人形である。

⑦　5・6限（教育学科3年ほか）

・講演のこと　－「おちば」の思想

・相田みつをの書－にんげんだもの

・まど・みちおの世界

最後の講義であった。学生は3倍にふくれあがっていた。他に2人の教授から学生の受講の申

し出があったからである。まず、先ほどの附属初等学校での講演の話からはじめた。そして、同じように( )に入る人物を想像してもらいながら進めた。「おちば」の詩は大学生にもしっとりと入っていった。学生に対しては、落葉はなぜ、あんなに美しい色をしていると思いますか、という問いを加えた。悲しみの色なのでしょうね、というと、多くの学生がうなずいていた。学生たちになると、「おちば」の詩は落葉であることをこえて、価値とは何かという、価値というものの象徴として受け止めたようだった。

そのあと、午前の講義で学生たちの関心を引きつけた、相田みつを「にんげんだもの」を再び取り上げることにした。相田の「書」作品をスクリーンに大きく写して、「書」としての「ひらがなの美」の世界を堪能してもらった。

講義の後半は、教授の先生方からもう一度というリクエストの多かった、まど・みちおの世界について、テキストの作品を読み味わいながら、その思想について話した。そして、韓日の文学教育には、これから、相田みつをやまど・みちおの詩のような、深い思想を、わかりやすく表現した文学が必要になったと思う、といって、講義をしめくくった。

講義を終えて

３日間で、６つの講義と１つの講演を行った。かなりハードなスケジュールであったが、充実感があった。日本の教育に対する、釜山教育大学校の学生たちの高い関心に支えられた講義であったと思う。多くの教授の参観も励みになった。釜山教育大学校国語教育科の李愼成教授、周康植教授ほか研究室の先生がたには、たいへんお世話になった。講義テキストの作成（翻訳）を手伝っていただいた申美熙さん、講義の通訳をしていただいた全允景さんには、改めて感謝申し上げたい。

FD 研究として

本稿は、韓国の大学で行った集中講義の報告である。釜山教育大学校の学生を対象として、教授の先生方の前で行った公開授業の記録でもある。以下、今回の講義内容、講義テキスト、講義方法について、若干の補足をしておきたい。

専攻の異なる受講学生（児童を含む）に対して、７回の講義・講演をどう組み立てるか、もっとも苦慮したところである。訪韓の時期が急に早まったこともあって、３週間ほどの準備期間しかなかった。同一テーマ、同一テキストでの反復講義の方法も考えたが、せっかくの機会なので、一部共通内容を含みながら、受講学生の専攻に対応するような内容・方法で構成してみようと思った。それと、日本の文学教育の概説的な講義にならないように、計画段階から、具体的な文学教材テキストの受容に的を絞った。日韓の教科教育の交流は、理念・概念よりも、具体的な教材テキストの交流と相互の共感的受容に重点を置くべきである、と考えていたからであった。日韓国語教育の比較研究として、これまで、韓国国語教科書の「詩」の翻訳・分析を試みてきたのも、同じ考えからであった（足立悦男・金京姫「韓国・国語教科書の詩（１～２）」『島根大学教育実践研究指導センター紀要』1998～1999、足立悦男・鄭淳功「韓国・国語教科書の詩（３）」同2000）。

使用したテキストは報告のとおりであるが、その他に予備のテキストを準備していた。金子み

すゞの詩（「大漁」「お魚」「わたしと小鳥とすずと」「つもった雪」ほか)、リュー・ユイ（中国）「かたつむり」、原田直友「はじめて小鳥がとんだとき」、山田今次「あめ」、谷川俊太郎「生きる」などの詩。また、アーノルド・ローベル「お手紙」、新美南吉「ごんぎつね」、宮沢賢治「やまなし」などの物語も準備していた。およそ10回分のテキストを準備し、受講学生の専攻と受容反応をみながら、適宜テキストを変更しようと考えていた。講義内容・方法を、受講学生の専攻・関心に対応させてみたい、と考えていたからである。担当教官から、講義内容・テキストの希望が出ることもあった。「かえるのぴょん」（谷川俊太郎)、まど・みちおの世界の場合がそうであった。韓日の比較文学において、おそらく韓国文学にみられない、日本独自の文学であったからだと思われる。

講義テキストの翻訳についても、ある程度の工夫をしてみた。韓国語の翻訳だけでなく、日本語テキストに韓国音のルビをふる、という方法である。（使用テキスト例を参照）日本語レッスンにおいて、日本語の正確な発音練習を取り入れるためであった。このテキストの方法によって、日本語のテキストは、日本語の正確な音声とともに受容されていったのではないか、と考えている。

また、学生たちの受容反応を知るために、何回かの講義で、詩について短い感想文を書いてもらった。【参考資料】として、学生の感想文の一部（各作品１人）を紹介しておいた。どの詩のどの感想文も、私には興味ぶかい内容であった。作品の問いかけるものを、きちんと受け止めた感想が多くみられた。日本文学の受容において、かなりの能力をもつ学生たちであった。すべての感想文を分析してみれば、日韓の学生の文学受容に違いがみられるかも知れない。各教科において、日韓教材テキストの相互の受容比較は、今後の比較教科教育研究の主要な課題になるであろう、と私は考えている。

先日（１／16, ２／６)、島根県下の本庄小学校（森泰校長)、大谷小学校（錦織明校長）で、韓国の絵本『こいぬのうんち（강아지 똥)』（クォン・ジョンセン文　チョン・スンガク絵）の公開授業研究が行われた。このあと韓国の小学校でも授業され、日韓の受容比較の研究がなされることになっていて、私もそのプロジェクトに参加の予定である。日韓の教育交流は、すでに、このように、教材レベルの本格的な相互交流を展開する時代になったと思う。本報告は、大学教育における、教材レベルの相互交流の試みとしてまとめてみた。FD 研究の視点から、ご批評いただければ幸いである。

【参考資料】受講学生の感想文（申美熙訳）

『のはらうた』（工藤直子）

「あいさつ」

私は蛇が書いた「あいさつ」という詩が気に入りました。蛇は気持ち悪いですが、この詩を読んだら、しっぽにあいさつする姿がかわいかったです。詩を書いた人の温かい心が感じられる詩です。特にしっぽが〈げんき　ぴんぴん〉という言葉が面白くて印象的です。

（ジュ・ウンギョン）

「ひだまり」

今の季節に感じてみたい気持ちです。とかげがひだまりで満足している姿が想像できます。気

持ちがよく、はいたりすったりする声が聞こえてくるようです。また、とかげのかわいい行動でひだまりの温かさが伝わってきます。

(キム・ミギョン)

「こころ」

人間の気持ちとこころは顔に現れますが、こいぬや動物はどうやって表現するのだろうかと考えてみたら、しっぽで表現していました。それをみると、人間やら動物やら生命のあるものはみんな感情をもっている、ということです。特にこいぬの立場で表現した点を新しいと感じました。

(チャ・ミギョン)

「くらし」

きりかぶの暮らしと私の暮らしは似ている。毎日〈どっこいしょ〉して暮らしているが、私はきりかぶのように自分の暮らしに満足していないようだ。

(シン・ゼユン)

「いのち」

このごろの私の気持ちと同じだ。私の心の中では暮らしを豊かにしてくれる人たちで幸せを感じている。いつもその人たちと一緒にいたいと思う。

(チェ・ソヨン)

「詩をかくひ」

風の語っている詩だが、風の温かい心が感じられて気持ちがいい。風がみのむしのやつがかわいくて明日の分に残しておいたそよかぜをだしてゆすってくれたという。みのむしのやつよりその風がもっとかわいいと思う。

(キム・ヘジン)

『まめつぶうた』(まど　みちお)

「けむし」

けむしはさんぱつが嫌いということが書かれているが、それだけで全体的なけむしの感じとイメージがよく描かれているようだ。

(ジョ・ヒョジョン)

「のみ」

〈あらわれる、ゆくえふめいになるために。〉消えてゆくために存在するすべてのもの・・。短いこの言葉の中に生の道、哲学があるようだ。

(イ・ゼミョン)

「みみず」

詩の着想がすばらしい。どうやって小さなみみずをみて、地球を、宇宙を思いつくことができるのだろうかと思いました。一つの物事をみながらその裏にある本質的な面を見つめる詩人の目がうらやましい。

(キム・ウンジュ)

「いびき」

父が寝ている時、いびきが聞きづらくて父の鼻を手でつかんでいたことがあるが、この詩を読んだら、私は父の素敵な夢の中の旅行を差し止めたことになるようだ。これから父がいびきをか

きながら寝ていたら、父が今どんな夢をみているかなと思うかもしれない。

（イ・ジウン）

「こゆび」（こわせ　たまみ）

こゆびのように弱くて、一人では何もできないように見える存在があまりにも多い。人間の私もそうなのだ。しかしそんな弱い存在が世のなかの隅々で各自重要な役割を果たす大切な存在であることを、この詩を通じて知ることができた。

（イ・ソンミン）

「おちば」（みつこし　さちお）

一番記憶に残る詩だった。特に、おちばを本のしおりにして秋をしまう、という部分で、周囲の小さいもの一つ、小さな出来事一つでわが人生はこんなに温まって豊かになれることがうれしかった。

（イ・ソンハ）

「ぞうさん」（まど・みちお）

この詩の１連を読んだとたん、韓国のある童謡が思い浮かんだ。〈こうしこうし　まだらのこうし　かあさんのうしもまだらのうし　かあさんに似ている〉。この歌の中の子牛は特別だ。ほかの子牛とは違うまだらのある子牛だからだ。それはまだらの牛のかあさんに似ているからだ。「ぞうさん」とよく似ている歌だと思う。この歌にどんなメッセージがこめられてあるか考えたことがなかったが、「ぞうさん」を通じて改めて考えてみる機会になった。

（キム・キワン）

「けしごむ」（まど・みちお）

この詩のけしごむは普通の人とは違って犠牲を喜びと思っている。私自身は犠牲を損害と思い込んでいて、犠牲をすることは無謀なことだと思っていた。でもこの詩は、犠牲を喜び、そのために最善を尽くしているけしごむを表現している。世を生きていくのに大切な一粒の雨のしずくと思われる。

（イ・ジユン）

「大きなアップルパイ」（まど・みちお）

大きなアップルパイという題目を見た時お腹がすいていた。１連を読んだら大きなアップルパイが牛の排泄物ということが分かった。まあ、おもしろいと笑ったが、全部読んだ時は人間がどんなに先入見にこだわっているかを知って、恥ずかしく思った。汚いと思うのは人間の観点からのものだ。この詩を子どもたちに紹介することによって、人間のもつ先入見ではなく、多様な観点でものことをみることのできる見方が育つに違いない。

（イ・ウォンジュ）

テキスト（例）

かえるの　ぴょん　　谷川俊太郎
카에루노　뽕

개구리 뽕

① かえるの　ぴょん
카에루노　뽕
とぶのが　だいすき
토부노가　다이스키
はじめに　かあさん　とびこえて
하지메니　카-상　토비코에테
それから　とうさん　とびこえる
소레카라　토-상　토비코에루
ぴょん
뽕

개구리 뽕
뛰는 게 너무 좋아
처음에는 엄마 뛰어넘고
그리고 아빠 뛰어넘어
뽕

② かえるの　ぴょん
카에루노　뽕
とぶのが　だいすき
토부노가　다이스키
つぎには　じどうしゃ　とびこえて
쯔기니와　지도-샤　토비코에테
しんかんせんも　とびこえる
신칸센모　토비코에루
ぴょん　ぴょん
뽕　뽕

개구리 뽕
뛰는 게 너무 좋아
다음에는 자동차 뛰어 넘고
신칸센(고속열차)도 뛰어넘어
뽕 뽕

③ かえるの　ぴょん
카에루노　뽕
とぶのが　だいすき
토부노가　다이스키
とんでる　ひこうき　とびこえて
톤데루　히코-키　토비코에테
ついでに　おひさま　とびこえる
쯔이데니　오히사마　토비코에루
ぴょん　ぴょん　ぴょん
뽕　뽕　뽕

개구리 뽕
뛰는 게 너무 좋아
날고 있는 비행기 뛰어 넘고
내친 김에 햇님도 뛰어 넘어
뽕 뽕 뽕

④ かえるの　ぴょん
카에루노　뽕
とぶのが　だいすき
토부노가　다이스키
とうとう　きょうを　とびこえて
토-토-　쿄-오　토비코에테
あしたのほうへ　きえちゃった
아시타노 호-에　키에쨧타
ぴょん　ぴょん　ぴょん　ぴょん
뽕　뽕　뽕　뽕

개구리 뽕
뛰는 게 너무 좋아
드디어 오늘을 뛰어넘고
내일 쪽으로 사라져 버렸어
뽕 뽕 뽕 뽕